

(2) ネギ

ア 品目の概要

(ア) 生理・生態

ネギの生育適温は12～22℃で、25℃以上で生育が悪くなる。近年は暖地で高温期の生育停滞が発生していることから、高冷地での栽培が注目されている。土壌pHに対する適応性は広いが、極端な酸性土壌や、多湿には弱い。収穫・調整作業に多くの労力を要するため、導入の際は機械化による作業効率化が経営上重要となる。

(イ) 栽培のポイント

① は種・育苗

発芽適温は15～20℃であり、3月には種、5月に定植すると、8月中旬から収穫できる。は種はチェーンポット®(CP303)へのコーティング種子2粒播きが一般的である。は種後は培土が十分に保水するよう、数回に分けたつぷりとかん水する。発芽が揃ったら低めの温度管理とし、軟弱徒長させないように控えめにかん水する。チェーンポットのは種量はその後の品質に大きく影響するので重要なポイントとなる。なお、当地域での実績は無いが、長野県野菜花き試験場では、育苗施設が足りず規模拡大に苦慮する場合の技術として、ロングピッチチェーンポット®を用いた育苗コスト低減技術（上記二次元コード参照）についても公開している。



育苗コスト低減技術

② 土づくり

ネギ類は酸性土壌を嫌うため、土壌の酸性度が高いほ場ではあらかじめ石灰などで酸度を矯正する。また、湿害に弱いため、十分な排水対策を行う。肥料成分量は10aあたり窒素20～25kg、リン酸15～22kg、加里20～25kgが目安となる。アブラナ科野菜やセルリー等、多肥の作物の後作では土壌診断を行い、ほ場に合わせて施肥設計する。

③ 栽培管理

チェーンポット苗は、専用の簡易移植機（ひっぱりくん®）を用いて定植する。作業時間の目安は10aあたり2.8時間程度である。

土寄せの目的は葉鞘部の軟白長確保であり、土中酸素の供給、倒伏防止、雑草管理においても効果が高い。中耕は除草・通気性の改善に有効で、必須の作業である。作業時にはネギを傷つけないように注意する。定植後3～4か月になると肥料吸収量が急激に増加するため、追肥は定植後1か月頃から、土寄せと合わせ3～4回に分けて行う。初期は軽く寄せる程度とし、中～後期は伸長程度に応じて行う。最終的には葉身分岐部まで十分に盛り上げ、30cm以上の軟白長を確保する。

栽培期間中に主に問題となる病害虫は、べと病、さび病、アザミウマ類、ハモグリバエ類などがある。品質が大きく低下することがあるため、適期防除に努める。

※詳細は、参考資料24ページ「ネギの病害虫防除」を参照する。

④ 収穫・調整

収穫期は十分な軟白長が確保された後とし、定植後 120～150 日が目安である。収穫・調整作業は、ネギ栽培の収益確保において最も重要な工程である。省力化には専用機械の導入が必須である。

(ウ) 注意事項

① 初期投資

専用機械の導入は大きな初期投資となるため、十分に経営計画を立てることが重要である。

② 残渣の取り扱い

植物防疫法に基づく緊急防除区域(令和8年3月現在 原村中新田地区)では、土壌の付着した植物体の持ち出しが禁止されている。そのため、防除区域内でネギを栽培する場合は、出荷から調整までを区域内で完結し、残渣も区域内で処分する。区域内で育苗した苗を区域外に移動する際は移動検査の対象となるため、注意する。また、区域内のほ場について土壌分析をする場合は、所定の加熱処理を施してからJA等に分析を依頼する。加熱処理を希望する場合は下記に連絡する。

連絡先：諏訪農業農村支援センター 技術経営普及課
0266-57-2931 (直通)

イ 輪作導入の事例取組事例「原村・S氏 令和7年ネギ栽培」

(ア) 導入の背景

S氏は、原村(標高1,000m)で令和7年度からネギの栽培を約3haの面積で開始した(一般的には50a程度から段階的に規模拡大する場合が多い)。定植は4月から8月、収穫は8月から12月の連続出荷体系である。

(イ) 栽培のポイント

① 作型・品種

複数品種によるリレー栽培を行っており、1月下旬から6月上旬まで10日ずつずらしては種することで出荷時期を分散している。定植から収穫までの期間は120～150日が目安となる(図1、表1)。どの品種も安定した収量が得られた。

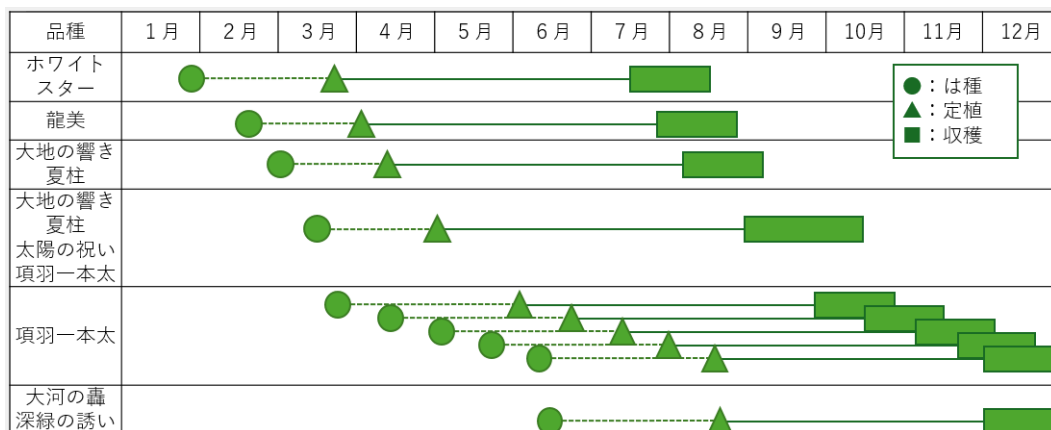


図1 令和7年度の栽培体系

表 1 品種の特性

品種名	早晩性	特 徴
ホワイトスター (タキイ種苗)	極早生	立ち上がり早くそろい良好、初作型向き 気温変動に注意し、適期収穫を心がける
龍美 (横浜植木)	早生	安定した伸長性で、早春播きに向く 生育期間の施肥量に注意し、太さを確保する
大地の響き (トキタ種苗)	中生	太りと伸びの生育バランスが良好 水管理、病害に注意
夏柱 (ヴィルモランみかど)	中生	葉の病気や高温に強い 排水対策に留意
太陽の祝い (トキタ種苗)	中～晩生	高温に強くそろい良好 適期を逃さず収穫する
項羽一本太® (トーホク交配)	中～晩生	高温期も品質安定・生育良好 さび病、べと病に注意
大河の轟き (トキタ種苗)	最晩生	高温に強く、草勢の衰えからの回復が早い 適期作業・適期収穫を心がける
深緑のいざない (トキタ種苗)	最晩生	太りと伸びの生育バランスが良好 適期作業・適期収穫を心がける

② は種・育苗

チェーンポットは定植時に崩れにくくなるようしっかりと土を詰める。培土には平均肥効日数で70～100日程度の窒素・リン酸・加里が含まれる「ガッチリ君」(トキタ種苗(株))を使用することで、追肥が不要になる。は種後、発芽までの目安は積算温度※で100日度である。催芽機を使用して均一に発芽させる。一本でも発芽を確認したら光を当てて徒長を防ぐ。育苗期間中は朝10時までにかん水を終え、夕方には乾く状態を維持する。気温が上昇する時期はかん水の時間を早め、回数を増やす。

※積算温度：期間中の日平均気温を合計した数値。生育程度の目安となる。



土詰め



催芽



育苗

③ 土づくり・施肥

土づくりは、まず、全てのほ場で土壌診断を行い、各ほ場の土壌の陽イオン交換容量(CEC)に基づいて、塩基バランス(カルシウム、マグネシウム、カリウム)を整えた。また、施肥は、土壌診断に基づいて、必要な分だけを追肥で補った。

④ 定植

チェーンポット育苗専用の定植機「ひっぱりくん®」を用いて定植を行う。機器を引く人と、苗の補充・土寄せを行う人の2名で実施した。



ひっぱりくん®による定植

⑤ 栽培管理

除草は中耕・土寄せを基本とし、除草剤（土壌処理剤）を併用。令和7年度はゴーゴーサン乳剤、トレファノサイド乳剤、ロロックス水和剤を使用した。追肥は、培土の肥効が切れるは種後90日頃に、硫酸を10aあたり20kg施用した。

春や秋の低温期に降雨が続くと、べと病の発生が問題となる。春はこれらの病害防除が中心となる。気温が上昇する夏以降は害虫の発生が増える。べと病やさび病、軟腐病などの病害防除に加え、アザミウマ類やシロイチモジヨトウへの防除が必要となり、防除回数が増加した。

⑥ 収穫と調整



収穫

収穫は3人/日、調整は5人/日で作業した。作業動線と機械の配置は作業効率を大きく左右するため、作業に合わせて工夫する。S氏の雇用労働力は計12名で、ローテーションにより全員が複数工程をこなせる体制を目指している。

収穫は日の出頃から始め、3人体制で17時頃まで続く。ねぎ専用収穫布「ベンリークロス®」（大紀産業(株)）に包むことで、調整作業場所でもコンパクトに保管することができる。収穫作業と並行して行う調整作業は、根葉切り2名、皮むき2名、箱詰め1名、補助（ネギや残渣の運搬）1名の計6名で作業を行った。あらかじめ前日収穫分を少し残し、朝一番から調整開始すると効率的である。



根葉切り

収穫されたネギを専用機械にセッティングし、根と葉を箱詰めに適した長さに切っていく。根を切る際には、莖盤まで深く切りすぎると、出荷後に軟白部中心の葉鞘が伸びてきて商品性を損なうので注意する。



皮むき

皮むき機は2台導入し、それぞれ1本あたり4秒処理を目標とするハイペースで行っている。1日あたり300箱（12,000本）を処理するスピードとなる。皮むき機はコンプレッサーの馬力が効率を左右するため、機器選定時には7馬力以上のものを導入することが望ましい。



箱詰め

箱詰めは、慣れるまでは最も時間を要する作業となる。箱の組み立てと箱詰めそれぞれに人員を割ける体制が望ましい。

注意事項として、作業場や残渣捨て場はネギ特有の強いにおいが発生するため、近隣に民家が無い場所に設置する。また、作業機械の騒音に注意する。

(ウ) 経済性

① 導入費用

ネギを一定規模で栽培する場合は、表2に示す専用機械の導入による省力化が不可欠である。能力や価格は機種により異なるため、補助事業等の活用も視野に入れながら経営規模に合った初期投資を心がける。

表2 主要導入機械の概要（令和6年度購入時点）

用途	機械名	メーカー	参考価格	能力
定植	ひっぱりくん®	日本甜菜製糖(株)	128,590	30a/日
	全自動移植機	ヤンマーHD(株)	1,796,300	10a/3h
管理	管理機	(株)クボタ	429,000	6～7馬力
収穫	HL10	ヤンマーHD(株)	3,348,400	900分/10a
調整(根葉切り)	スーパーきり子	(株)マツモト	1,000,000	2700本/h
調整(皮むき)	ベストパワー®	(株)マツモト	900,000	800～900本/h
	コンプレッサー	-	1,500,000	7馬力以上

※「ヤンマーホールディングス株式会社（ヤンマーHD(株)）」

(合計約910万円)

② 経営比較

ネギは年間労働時間の7割以上が収穫・調整に費やされるため、この期間の作業能力に応じて規模を決定することが望ましい。

《令和7年度 ネギ実績》

面積：約3ha

出荷期間：8月～12月

出荷量：2250箱

売上：33,740,000円

➡ 10aあたり粗収益
1,124,000円

参考 ブロッコリー（長野県農業経営指標より）

秀品250ケース出荷の場合

➡ 10aあたり粗収益
510,000円

※通常の経費：332,000円

Hs防除上乘せ経費：360,000円

Hs防除…D-D剤代+捕獲作物種代

※ 歩留まり率70%、箱単価1,500円で計算